

[追悼]

## 柴田松太郎さんのご逝去を悼む

真野勝友\*



本会会員の柴田松太郎さんが去る4月3日にお亡くなりになりました。享年85歳でした。突然のご逝去で悲しみに耐えられません。謹んで哀悼の意を申し上げます。

柴田さんは東京都目黒区のご出身で1926年の生まれでした。その後、麻布中学校を卒業されたあと北海道大学に入学され、地質学科を卒業されました。

柴田さんは始め丹沢山塊の地質と古生物を研究されました。特に古生物学的研究では *Lepidocyclina* を発見するなど、この地域の地質時代の特定に先導的な成果を挙げている。その後、ウニなどの棘皮動物を中心とした研究をされました。

柴田さんは東京で教職に就かれる一方、資源科学研究所（以下資源研）での二枚貝の硬組織の研究を始められ、この仕事は後に東京教育大学（現筑波大学）地質学教室に移され続けられました。この頃の柴田さんの研究は二枚貝の殻に含まれる有機物・コンキオリンや貝殻の構造の研究などでした。貝殻構造の研究は小林巖雄さんと共にその成果を地質学会や当時設立されたばかりの化石研究会（以下化石研）などで発表されています。こうして、柴田さんの研究の方向は従来の化石の記載的研究から微細構造の研究へと進んで行きました。

この当時、化石研は資源研を中心に例会の会場となっていました。このためここを研究の拠点としていた柴田さんもそれに関わり、例会などでも常連となっていました。化石研は古生物學研究の近代化に向かって研究の理論や化石の微細構造、古生態学などの研究方法の開拓とその成果を目指していました。柴田さんの研究もその方向に呼応して進められていました。このためその運営にも積極的に関わって来られました。資源研では化石の有機物研究では先進的な研究を進められた藤原隆代さんがおられ、いわば化石研の旗

手とでも呼ばれるような存在でした。資源研はこうした研究の一拠点でありました。貝殻構造の研究は化石の微細構造の研究の分野ではその代表的なものでした。

このような化石研の研究方向は他の大学にも波及し、例えば北海道大学でもかつて柴田さんの同級生だった魚住悟氏なども行うようになり、柴田さんは時々これを話題にしては、そのことを喜んでいました。

この頃の柴田さんは教職に携わったから研究にも関わっていたのですが、こうした傾向は地質学の他の分野でも大きな流れとなっていました。第四紀学の羽鳥謙三さん（故人）であり、鉱物学の倉林三郎さんなどもそのような方たちであったわけです。柴田さんは教職分野について事あるごとに若溪閣の強さに触れられていました。管理職分野でも支配的な勢力を持ち、それが与える教育へのさまざまな影響に対して批判的でした。自主性が基本である科学研究を進める研究者という目で、教育分野を見ると教育方法や教師への管理職の関わり方の仕方に、特に教師への介入といった傾向があることに対し、教師の自主性が損なわれていることを常々指摘されておられました。教育者であり、また研究者であった柴田さんならではの言葉であり、姿勢だと思っています。

教員を退職されたあとも研究環境の変化により研究対象を変えながら、ごく最近まではイチョウの観察を通じた実践的研究をしていました。イチョウは学校教育の現場では生物進化の教育の教材として用いられることがしばしばありました。柴田さんはイチョウの語源的な研究にも感心をもっておられ、そのためにロンドンにある大英博物館にも出向いてリンネの原点にまで触れて調べていました。さらに進んで実践的研究にも至り、現役の教師との共同研究に及びその成果を発表するなど、教育との関わりを持ち続けながら研究を進める点では一貫しておられました。こうした姿勢は若い教師にもそのあり方に多くの影響を与えていました。

昇天されたあの世の世界でも柴田さんがこつこつと研究している姿を思いやられます。そしていまもわれわれに名物のあのすばらしい大声と美声のエル [フレ！…フレ！…頑張れ！…] が天上から聞こえて来そうで、我々を励ましてくれているような気がします。

改めて柴田さんのご冥福をお祈りします。

(2011年6月19日)

\* 元化石研究会会長